

「研究」佐伯荘（その六）中世後期

宮下良明

（会員・佐伯市古区）

平氏政権の成立から、江戸徳川幕府の滅亡に至る約七百年間を封建時代と言ひ、普通には信長、秀吉による織豊政権の成立を境に、前期と後期に分けて考へている。

中世とは、このうちの封建前期にあたり、封建後期を近世というのに対する呼び方である。

時代でいえば平氏政権にはじまり、鎌倉・南北朝・室町・安土桃山時代にいたる時期である。年代的には、十二世紀後半から、十六世紀後半にいたる約四百年間にわたっている。なお、室町時代の末期約百年間を、戦国時代として区別することもある（日本史研究）。ただし、平安時代後期を合算すると約七百年間を中世ともいう。

中世後期 南北朝時代（一三三二—一三九二）が終わり、足利氏が京の室町に幕府を開設してから、織豊の時代までを指して中世後期と歴史家はいつている。厳密には慶長年間を加えて後期ともいう。

一般に中世後期の村落の秩序はきわめて厳しい掟と村規則によつて維持されていた。それは「惣」という組織によつて知ることが出来る。惣とは室町時代、荘園に現れた村人達の共同的結合で、村民全体の名によつて村の意志を表示し、惣中・惣郷・惣村・惣浦等、権力者へ対向する一連の呼び名をいう。

惣百姓の村落結合の強まりは、南北朝時代から始まり、国人・国衆やその一揆は、内乱時代を通じ一貫して南朝方、または北朝方であつたわけではない（永原慶二）。つまり時代の状勢次第でどちらにもついた。佐伯荘内の石造物金石文等に、南朝・北朝年号があるのはそのためである。

下剋上 下層の者上層の者に剋つ、下の者が上の者を凌ぎ侵すことを言ひ、下層の者が勢力を得てきた社会風潮を指す。応仁の乱（四六七）後、天下は麻の如く乱れた。歴史上一つの変動期といわれている。

このあたりを境にして、中世後期を戦国時代と呼んでいる。土一揆・徳政一揆・一向一揆等が全土に広がりを見せ、守護が家臣から地位を奪われ、荘園領主が次第に没落の道をたどり、地頭は名主達によつて追放の憂目に

遭う。替わって次々に戦国大名が生まれたのもこの期からである。当佐伯荘も例外ではなかったろう。下剋上の風波が早く押寄せて来たであろうことは、時代の状態推移によっても判断される。

系図上の佐伯氏が、中世を通じて荘全域をすべて統括し、権力の頂点にあつたとするこれまでの主張は、一考を要することになるうかと考える。すなわち、各所の名主達が豪族化し、国人衆と呼ばれ台頭してきた室町期の姿が、各所に遺る石造物（本匠村・宇目町）、鰐口ワニグチ（常楽寺・宝光寺）等の金石文によって当時を伺い知ることが出来る。つまり惣村・浦中・宮座等の村落組織が強固に発達し、上層階級を圧倒し拍車をかけるのも、中世後期戦国の世からといわれている。

慶長六年（一六〇一）佐伯領に入封した毛利高政も、領内の旧名主達に、年貢納入を目的とした多くの文書を發送し、領民の育成に圧力を加えた政策を想像してみても、代々受継いだ物の力による村落結合の強さが、分かろうというものである。

宮座 中世後期の村落社会には宮座があつた。簡単に説明すると、前近代社会では守護神の祭祀ということが、

大小どんなレベルの集団社会においても、最も重要な課題であつた。もとより在地村落でも同じである。

古代の祭祀は、同じ姓を持つ一族を単位として行われる同族祭祀であつたが、中世では地縁的結合を軸に行われるようになった。この中世以後の祭祀集団を宮座という（中世後期の村落より）。中世後期佐伯荘も各村落毎に守護神を勧請し、血縁的・地縁的関係者によって維持された。それは今日の宮總代・宮庄屋の名称が、中世の宮座配グハクに代わつて残つたものと思う。

家船（船上生活者）家船は中世に発展し、瀬戸内海・豊後海に広く分布していた打瀬網ウツセ・手操網テウ・一本釣等である。人間の原始的な生活形態が採集狩猟であり、古代神社祭祀においては、アワビ・サザエ等の海産物が海民族の採集で、供物として重要な機能を果たした事実は史書に詳しく、海人部アハヒと呼ばれる部民がいたことは周知の事実であつて、これと密接な関係を示す地名は、瀬戸内海・九州には多い。

しかも豊後海水域の大方の村落は、家船の本拠地尾ノ道・能地ノヂなど瀬戸内諸域と、海道を通じて文化交流は深い。死んだら広島に行くとか、広島に鍋買に行くと言っ

た古くからの言い伝えが、流言されるなどは海からの交流を示す最たる表現といえよう。言葉はほとんど瀬戸内の地方と共通の訛りである。その語源は、家船や宗教関係に求められる。

一方、湾岸を離れた後背村落に行く程、密教系信者が多く、沿岸集落は総体に浄土系信者が多い。後者は安芸門徒による繋がりによって広まったものである。

貴種流離譚

従来佐伯の中世史像は、緒方惟栄に始まり、惟定の代まで約四百年、佐伯氏支配一色にぬりつぶされた傾向がなかったとはいえないが、惟栄にいたってはその実態は掴み難い。諸々の伝説が多く流布される中で、歴史学者の言葉にしたがえば、惟栄の佐伯領支配云々説は、虚構が今までの認識で、何等関係が見当らずという見解が、現在の認識という。したがって、惟栄と佐伯荘を結びつけたのは単なる俗説にすぎない。これに目くじらを立てるわけではないが、指摘の必要性はあると思う。

貴種流離譚とは、高貴な人の御落胤説や、出自が神秘化された不実在の人物、或は実在性のうすい人間をとらえて史実化し、尾鱗オビシを付けた書物を民衆に示して、身分

を誇示する目的をいう。つまりお墨付等がそれに当たる。豊後国においては、惟栄の祖先による蛇婚伝説をはじめ、大友の初代能直が、源頼朝の庶子説、毛利高政の豊臣秀吉の庶子説等が、貴種流離譚に該当する。

史実を追い求めることは、厳しい歴史認識を必要とする。少なくとも中世佐伯荘を論ずる限り、豊後国内荘園の中の一つの荘として眺め、他荘と比較検討を加える上で、中世佐伯史を論ずる研究が、現在最も必要な課題ではなからうかと考える。

海の領主

荘園といえば、兎角凶田帳に記す反別を基盤にした田園風景のみを想定し、百姓といえば、鍬・鎌

のみを想定しがちに思われるがそうではない。中世以前は武士・職能民・其他の大衆も百姓と言ひ、その中に農民がいた。海民族も大きくは百姓になる。河海もまた重要な荘園の一翼として中世をつくり上げ、国の発展に尽くしてきたことはいうまでもない。

海には痕跡を留めるに十分な物的証拠は乏しいが、古代・中世では海人集団の長や領主的人物が常に存在した事実は、歴史に詳しく異論はない。その権力争いは、常に凄まじい闘争を繰り返してきた。当佐伯湾も例外では

ない。海を支配する者が、陸部も支配し得たものと見て間違いない。海の道に強い影響力を持った時の幕府と密接な関係を保ち、莊園の領家と結び付いた時々の権力者が、連綿として佐伯氏族の一門が支配していたものとは考えられない。

歴史は実態のない階級が作ったものではない。佐伯湾の条件は交易は勿論、軍事的にも多方面にわたり、その重要性は古代・中世・近世と、何時の時代もそう変わるものではない。

参宮帳 織田氏が去り豊臣秀吉の全国支配が成って、日本全土の検地(大関地検)が天正十年(一五八二)から慶長三年(一五九八)にわたって実施され、数百年の長きに亘った莊園制に終止符がうたれた。佐伯荘も山口玄蕃(玄蕃卒)が検地したことは御承知の通り。

天正―文禄―慶長と続く頃の佐伯領の歴史について、参考にする郷土資料の出版物は多い。その中に参宮帳と水夫屋敷高帳というのがある。いずれも中世末期の大衆行動と、生活背景が分かるのでその一部を紹介すると、

天正十五年から十九年にかけて、佐伯領ではお伊勢参りが盛んに行われたようだ。当時は高津軍が豊後一円に

侵攻した時代で、佐伯領も惟定方と激戦が続いたという(大友興廢記引用佐伯市史)。にも拘らず総体的に領内は安定していたものと推測する。参宮帳がそれを如実に物語っている。一方、後世の読物である大友興廢記を史実として促えることはできないが、物語の奥にひそむ信憑性のある個所を取り出せば良い、堅田合戦もそうである。

当時、伊勢参り熊野三山詣等の行事は、その地域に居住する先達・檀那によって先導され、神宮側の御師(神職)によってすべて賄われた。参宮帳に、大友興廢記を書き上げた杉谷宗重に関係した内容と、時代考証も大事と思うので、二、三掲げてみよう。

一、天正十八年三月三日の記に、豊後国佐伯衆二人、杉谷五右衛門殿、高畑勘左衛門殿とある。(註)佐伯領最後の莊園支配者か?佐伯惟定に従って文禄元年(一五九二)の朝鮮出兵以後、藤堂家臣となり伊勢津領に所替えした人物達である。杉谷五右衛門は、江戸時代中期大友興廢記を書き上げた著者、杉谷宗重(写真参照)の祖先に当たる。高畑勘左衛門の子孫は、幕末まで藤堂家臣として仕えた。高畑七郎右衛門の祖先に当たる。(佐伯史談一五九号佐伯朗氏引用)。佐伯市には、杉谷・高畑



杉谷宗重墓
(大友興廢記の著者)
所在地
熊本県波野村



なる地名が今も残っている。他国に所替えしても先祖の地は恋しく、地名を我が名字として名乗ったものである。う。

一、ひあな・ふけん坊・くへやと・大宮司殿には、御手洗一族の名が見える。佐伯領各地域の名主の地位にあった人物達であろう、財政的には豊かさを想像される。

参宮帳の内容を思うと、約四百年過ぎた今日でも当時を偲ぶ地域の背景や、中世後期における民衆社会の動向と背景を知る価値の高い史料ではなからうか。

水夫屋敷高帳

毛利高政が日田から佐伯領二万石に転

封された慶長六年(一六〇二)から数年後、八幡山(現城山)に築城した。莫大な築城費の捻出先きを、水夫屋敷高帳の内容から一つの推論が成り立つ。

それは、当時流布された言葉「佐伯の殿様浦で持つ」の通り、中世・近世の頃、浦辺衆が海産物で他国・他領との交易によってどれ程利益を得ていたか、海との背後関係が分かるうというもの。浦々の有り様が想像される。そこで屋敷高帳の内容を、二、三の推論を加えて、正してみることにする。

一、佐伯湾の深奥部に位置する「戸穴」は、古代「穂門郷」の時代から水軍の根拠地として、豊後海の要であった。通過する上下船、停泊船からは浦銭・泊銭を徴収した。(綱野善彦中世再考引用)また、造船等から上る収益は莫大な額であった。なお、戸穴には船所から変名したとされる船倉の地名があり、これ等も前述を証明するに足る事例であろう。

二、古来戸穴は供御人(供御人とは神社または朝廷に供物を献ずる義務と特権をもつ人民)の居住地で、荘園領家から特権を保障され、漁撈・舟運等に従事し、主として海産物を貢納する本拠地であった(戸穴庄は皇

室八条院領)。豊後風土記にいう穗門郷戸穴の地名の歴史をみても、十分納得の行く論と考へる。

三、屋敷高帳の文意を解釈すると、海崎組・宮ノ内組に分かれ重大時には水軍となる。航海術にたけた海の強者達の組織であろう。傍証として、慶長五年(一六〇〇)佐伯湾内大入島の北端、唐船バエに漂着したとされるオランダ船リーフデ号の船長、ウイリアム・アダムスが残した一部の手記が、前述を立証する裏付けになる。

以上二、三点を取り上げ掲げてみたが、現役の水夫(水夫の退職者)に課した居住税のようなものがこの高帳であろう。晞干浦には十二才の少年にまで、きびしく取立てたことが記されている。海に関係する歴史は尽きないが、以上の研究はこれから取り上げる問題と考へる。

古代―中世の海民族によつて開発された海の道、四国沖を黒潮に乗り熊野から伊勢方面への「南海道」、また、豊後海から瀬戸海を上る「西海道」と、海の道から直輸入した陶磁器や石材から諸物の流入、領家への年貢の納入、他国・他領との文化の交流、材木・木炭の搬出等々、中世荘園社会の研究に科せられた問題は多い。その中で



穂門郷(晞干裏山より佐伯方面)



穂門郷(彦岳山頂より大入島)



唐船礁(矢印)

特に瀬戸の海民族との連携は強い。海部郡佐伯の地名は瀬戸内の国々に点々として存在する。特に倉橋島の職能民「船大工」、塩飽諸島の水夫「佐伯塩飽屋号」とは、深い繋がりを保っていたことを付け加えて終わりとした。あまりにも長い中世七百年間の荘園制を私ごとが論ずる幕ではなかったことを痛感する次第です。

参考文献 「荘園に関する諸書」